

2015年度 岐阜県生活指導研究協議会 基調提案

「共同を通して、苦しさから幸せな世界へ」

文責 安田 吉輝

0 昨年度の実践より

昨年度の基調提案では、「生活指導研究の基本である、『班づくり』『核（リーダー）づくり』『討議づくり』を大切にしよう」と呼びかけた。そして、昨年度秋の学習会では、「会社はじめました」という学級内クラブ活動に取り組んだ実践が報告された。

この「会社」は、活動目的や内容・方法は子ども達が考えるものになっている。そのため、「会社」が存続するのか、「会社」のメンバーが増えるのかということは、活動目的や内容・方法が子ども達のニーズに合っているかどうかにかかってくる。また、会社活動を進めていくうえで、様々なトラブルを解決したり、人間関係を調整したりする力を育てることが期待できる。こういう「会社」の機能は、私達が「班」に求めてきた機能でもある。

また、「会社」を設立し、活動を維持するためには、リーダーとしてどのような資質が必要であるかが問われてくる。軽い気持ちで「やってみたい」と「会社」を作ったものの、活動を軌道に乗せることができなかつたり、人間関係を調整することに失敗したりして「倒産」していくものも多く出る。そんな中で、A子は、仲間とのかかわり方を学び、変えようとしている。また、「会社」でリーダーを経験した子どもたちが、運動会などの場面でリーダーとして仲間のために動いていく様子も報告された。

さらに、「会社」を維持し、活動を広げるためには、一定のルールが必要であると子ども達が気づき、自分達でルールを作り出していく。細かく報告はなされなかったが、こういうルールづくりの場面ではある程度の「討議」がなされたと思われる。

つまり、「会社」という学級内クラブ活動を導入することで、この学級では「会社」をもとにした「班・核（リーダー）・討議づくり」が進んだのである。形式的な「班・班長・学級委員・学級会」という場とは異なるところで、本質的な「班・核（リーダー）・討議づくり」が進んだということは、私達の実践に大きな示唆を与えてくれる。

1 私たちの苦しさ

子どもをめぐって 保護者をめぐって 同僚(管理職)をめぐって そして…

上記のように、子ども達が生き生きと楽しい生活を作り出していく実践もあるが、残念ながら子ども達に振り回され、日々の業務に追われている状況も相変わらずである。

以前のレポートからは、「授業中に先生の言うことがきけず、授業が止まってしまったので、教務の先生に鞠しまいまでさせられて叱られた。『先生の言うことが聞けないなら帰きなさい。(出てきなさい。)]』と言われて、大泣き。腕を無理やり引っ張られて教室から連れ

出された。」という記述がある。

また、各務原サークルでは、「毎月、色々な取り組みや目標が降りてきて、担任である自分でも覚えきれない。」という報告がなされた。

なぜ、こうなっているのでしょうか。岐生研常任委員会では、教師の苦しさについて、次の三点から考えた。

- ①子どもをめぐっての苦しさ
- ②保護者をめぐっての苦しさ
- ③同僚（管理職）をめぐっての苦しさ

①子どもをめぐっての苦しさ

教室には、様々な子どもたちがいる。授業中、おしゃべりを止められない子。仲間とよく喧嘩をする子。ぼんやりとしていて、何を感じているのか分からない子。学校に来て、午前中は寝ている子。

いわゆる「周囲に迷惑をかける子」として、「反社会的行動をする子」や「非社会的行動をする子」と、位置づけられる子たちである。

また、一見「よい子」と思われる子の中にも、言いつけはきちんと聞き、そつなくこなすが、一方で仲間からの信頼は薄く、孤立しがちな子もいる。こういう子は、周りの状況を過剰に意識している点で、「過剰適応」と言われる。

こういう子ども達をめぐり苦しさには、次のようなことがある。

トラブルのたびに指導をしても、同じことを繰り返す。先生や仲間に対して「死ね！」などの暴言を吐く。仲間のちょっとした失敗を大げさにバカにする。トラブルについて解決の道筋を示しても、納得できない。強くしかれば、その場は収まるが、教師に対して反抗的になる。

また、無気力な姿を見せるので、活動を工夫してみるが、全く取り組もうとしない。仲間が声をかけるが、しらけた反応が返ってくる。

なぜ、他人を攻撃したり、かかわりを断ったりするようなことしかできないのであろうか。大きな原因の一つには、「能力主義的価値観」があるように思う。

様々なテストで序列をつけられ、それが将来の生活にまで影響するように思い込まされている中で、子どもにとって学校の価値観はほぼ絶対のものになっている。つまり、「できる」「できない」がその子の現在や将来の処遇を決めていく要素となっている。現実には、子ども達の未来がどのようなものかは分からないし、現在でも「できる」人が満足のいく生活をしているとは限らないが、学校現場では、「できる」ことが唯一の価値のように扱われている。そういう中で育ってきた子ども達にとって、「できない」ことを認めることは、かなりの抵抗を持つ。しかし、現実には様々なテストや検査で、「できない」ことを身にしみて味

わわせるような仕組みになっている。そこで、子どもは荒れたり、無気力になったり、自分は「学校の価値観に乗っている」と言う行動をしたりすることでしか、自分の尊厳を守ることができないのである。

学校現場で、子どもを「能力主義的価値観」に追い込む仕組みは様々にある。様々なテストや検査のほかに、先生一人が担任する子どもの数の多さがあげられる。35～40人の子どもを一人で受け持つ現状では、トラブルの際に子ども達の言い分を丁寧に聞くと言うことはできないことが多い。

また、児童会（生徒会）、児童（生徒）委員会のキャンペーン活動で、学級ごとに評価される活動があげられる。「チャイム席」「私語なし掃除」など、日常的に取り組むべきことがのしかかってくる。中学校では学級活動の時間に何を行うのかは学年ごとに統一となり、学級独自での活動を行うことはかなり難しい。このような状況の中で、困った行動をする子どもにかかわり、その子の状況をつかみ、仲間とともに考える、という取り組みは不可能に近い。

さらに、時間的なゆとりのなさ、があげられる。年間授業時間数ぎりぎりの中で、子ども達のトラブルを読み開き、温かい人間関係を作るように働きかけることはかなり難しい。

結果的に、困った行動をする子どもは叱られるか、無視されるかになってしまい。その子の不満は積み重なっていき、より強い行動をとるようになってしまう。また、困った行動をする子に対する仲間の評価もマイナスとなっていく。子どもの人を評価する目は、一番近いおとなのふるまいから学ぶことが多いためである。こうして、この子は、教師からも、仲間からも見捨てられることになっていく。

②保護者をめぐっての苦しさ

モンスター・ペアレントという言葉が日常的に聞かれるようになって久しい。学校に理不尽とも思える要求をしたり、時には、教育委員会やマスコミに直接訴えることもある。

学校としては、保護者への対応は最悪の事態（裁判所への提訴など）を想定することになる。従って、子どもの問題行動や、保護者からの訴えに対しては、「時系列で記録」「管理職の指示」「日常の指導経過（週案簿）を提出」という指導が行われることになる。

このような過敏な指導は、教師を萎縮させ、保護者と腹を割って話すことをできなくさせていく。

モンスターとまではいかないが、参観日などの行事には出てこないなど、学校の活動にあまり協力的でないように見える保護者、また、子どもとかかわる時間が持てない、と言う保護者もかなり増えてきている。

つまり、私達が「保護者と言うものは、子どもの家庭学習を見届けるのが当たり前」「子どもの持ち物を点検するのが、当たり前」「学校からの通信には、目を通すのが当たり前」というスタンスでいては、保護者との信頼関係をつくることは難しくなっている。

③同僚（管理職）をめぐるの苦しさ

中学ではかなり以前から顕著であり、小学校でも顕著になってきている傾向として、「学年（学校）で同一歩調」という事柄がある。学級会の内容をあらかじめ統一する、係活動の種類や内容を統一する、授業の発言の仕方を統一する・・・などなど。「〇〇小（中）スタンダード」として、とにかく統一しようとする。「同調圧力」というように、私達は周囲と違う行動をとることに抵抗を感じるどころがある。そういった感覚にも依拠して「〇〇小（中）スタンダード」は、大きな流れとなって私達を飲み込んでいく。担任の先生はひとりひとりの子どもを見つめることができなくなり、学級全体としてどう行動するのかを子どもに強制することになる。そして、「学級全体」の行動に乗れない子どもは、「問題児」として扱われることになる。

④そして、私達がたたかうべき相手は？

3つの視点の問題が出てきたところで、次のような問いを立ててみたい。

- ①子どもをめぐるの苦しさ では、ひとりひとりの子どもの特性に寄り添えない原因は何か？
- ②保護者をめぐるの苦しさ では、自分の子どもの事を真剣に考え不安を抱いているのに、「モンスター」と名付けるのはなぜか？
- ③同僚（管理職）をめぐるの苦しさ では、「ひとりひとりのよさを伸ばしたい」と願う教師集団の中で、「統一化」の方向に進めようとする力のみなもとは何か？

①の、ひとりひとりの子どもの特性に寄り添えない原因は何か？という問いに対しては、すでに現状を述べたところである程度答えは出ている。

「能力主義的価値観」がそれである。学校は「子ども達に力をつける」ということをうたい文句にしているために、必然的にすべての活動が「できる」「できない」という基準で子ども達を評価するものになっている。（これは、『二分的思考法』に通ずる）各種委員会からのキャンペーンをみても、ひとりひとりの子どものやりにくさを集団で解決しようとするものではなく、集団としての形をそろえることを優先したものになっていると思われる。できない子どもの状況を考え、誰が、何をするのかという具体的な援助の手立てを教師が学級の仲間と相談していく活動が保障されない状況では、できない子どもは批判され、無理やり取り組むように強いられるのである。（ここで、批判の根拠となるものが、間違っただけの平等観と、自己責任論である。）

ここで、浮き彫りになってきたことは、学校の様々な活動は子ども達ひとりひとりの生活の基盤をつくっていくために、たがいに援助しあうことを主眼に置くものではなく、できない子どもを自己責任の名のもとに、おいてきぼりにしていくものであるということである。

②の、自分の子どもの事を真剣に考え不安を抱いているのに、「モンスター」と名付けるのはなぜか？

一つには、保護者の子育てに対する不安が募っているということである。

40～50年前は、その是非はともかく、幸せな人生というもの、ある程度常識化されていた。従って、子どもを幸せのレールに乗せるために必要なものも明確であった。しかし、現在はそのような「幸せの形」は崩壊している。従って子どもの養育に必要なものも明確ではない。そういう状況の中で、保護者は自分の子育てに不安を抱くのは、当然である。そんな、不安の裏返しで「モンスター」と言われる行動に出ることは理解できる。

今一つには、保護者の養育責任が過剰に意識されていることである。

「モンスター」とは、怪物と言う意味である。それは「まともでない」という意味を含んでいる。一体何を基準に「まともでない」と判断するのであろうか？

教育基本法にある「保護者の養育責任」という言葉があげられる。この言葉は、かなりあいまいである。そのあいまいさについて、子育てについて社会が果たすべき役割をすべて、家庭に押し付けるようになってきている。40～50年ほど前でも、仕事に忙しく、十分に子どもと接する時間が持てない保護者はいた。しかし、それを補う形で、祖父母や隣近所の人たちが子どものケアを担っていた。現在では、保護者の忙しさは変わらないが、子どものケアを担う場所が少なくなっている。

こういう背景の中で「保護者の養育責任」といわれると、保護者は子どもの行動の全てに責任を負うことになる。それは、現実には不可能である。従って、現代のほとんどの家庭が「子どもの養育責任を果たしていない」とみなされることになる。こうして、ほとんどの保護者は自身の子育てに対して自信を失い、不安にさいなまれることになる。

一方、学校の側からすると、「保護者の養育責任」という考えは、保護者への要求を出しやすくする根拠となる。しかし、保護者の側からすれば、家庭の状況も分かっていない（と思われる）学校に批判されることは耐えられない。こうして学校と保護者の間に不信感が生まれるのであろう。

ここで分かってきたことは、「保護者をめぐっての苦しさ」の背後にあるものは、社会的な子育ての責任を放棄し、保護者にすべてに責任を負わせるような仕組みである、ということである。

③の、「ひとりひとりのよさを伸ばしたい」と願う教師集団の中で、「統一化」の方向に進めようとする力のみなもとは何か？

一つ目は、教員の忙しさがあげられる。英語講師として招かれたアメリカの先生が、「日本の先生は、クレイジーだ」と述べたそうである。毎日のように、20時まで残って仕事をしていることが当たり前状況に対して言われた言葉である。

このような状況では、与えられた仕事をこなすのに精いっぱいになり、「ひとりひとりをじっくりと見つめ、特性を把握する。」と言う余裕はなくなり、「とにかく、目の前の仕事をこなすために、みんなで統一して取り組んだ方が楽」という傾向になってしまう。

二つ目は、改訂（改悪）された教育基本法とその法律に基づいて作られた学習指導要領の存在である。

そもそも戦後の教育は、戦前・戦中の国家主義的・画一的な教育の反省に立って、「地域の独自性」「教員の個性」「子どもひとりひとりの個性」を大切にすることから始まった。しかし、その理想は様々な民主的教育団体の成果や主張を切り捨て、徐々に壊されていった。

改訂（改悪）された教育基本法とその法律に基づいて作られた学習指導要領の本質は、「教育内容と教育方法の国家主義化・画一化」である。現状のところ述べてきた〇〇小（中）スタンダードは、その象徴と言うべきものである。また、教育基本法の改訂（改悪）とともに実施された「全国学力状況調査（学力テスト）」も同様の位置づけを持っている。

改訂（改悪）された教育基本法やその法律に基づいて作られた学習指導要領が、私達の教育活動を外面から、内面から規制するようになってきたことも「統一化」の背景としてあげられる。もうすぐ実施される「道徳の教科化」はその最たるものであろう。

こういう「統一化」が、ひとりひとりの子どもの苦しさに寄り添うことを困難にし、保護者の子育てへの不安を助長していることになる。

2 苦しみの打開のために～三つの共同を～

以上のような、「苦しさ」のなかで、私達はどのように子どもとその保護者、私たち自身の幸せをつかむための実践を行うことができるのであろうか？

① 子どもとの共同を

まず、考えるべきことは、「目の前の子どもを敵にしない」ということである。「反社会的行動」「非社会的行動」「過剰適応」の子どものほかにも、学校になじめない思いをしている子は多くいる。こういう子ども達に対して、「この子は、どんなことを感じているのだろう」と、問いかけるまなざしをもつことである。

子どもの行動の原因は、いくつか考えられる。生まれつきのやりにくさ、育ちの中でのトラブル、たくさんのマイナス経験、その子の実態と教育のずれ、などなど・・・

様々な視点からその子を見つめ、原因を考え、指導の仮説を立ててみるのである。

仮説を立てたなら、次は検証する作業である。

一つ目には、その子へ教師が直接かかわると言う方法がある。孤立しがちな子どもに話しかけ、その子が自分の居場所が作れるように教師が包み込んでいく。あるいは、反抗的な子どもの話を聞くなかで、反抗したい原因を探りながら、教師は敵ではないことを伝えていく。など、様々に以前から行われてきたし、今も行われている。

二つ目には、その子へのかかわりに、学級集団の力を借りると言う方法がある。学級で問題をもっている子について、班長会などのリーダー層と話し合うことである。どの学校でも行われているケース会議を、学級の中で行うことをイメージすれば良い。その子が、なぜそういう行動をとるのか、自分達はどんなことができるのかを話し合ってみる。ひよっとすると教師の思いもよらない視点が出されるかもしれない。また、それぞれの子どもに合わせた役割分担がなされるかもしれない。最初はどううまくいかないものである。リーダー層の子ども

は、教師の権威を背景にして、仲間に言うことを聞かせるのが仕事、と誤解しているからである。そういう子たちに「その子の状況を理解し、共感すること」「どうしたらよいか、みんなで考え、行動すること」がリーダーの仕事であることを教えることが「核（リーダーづくり）」の中心なのである。

この「目の前の子どもを敵にしない」ということを実践するためには、いくつかの「子ども観の転換」が必要である。

⑦「困った子は、困っている子」という視点である。困った行動をとる子は、周りを困らせようとしているのではなく、そうせざるを得ない状況に追い込まれている、と考える。そして、何がこの子をそこまで追い詰めたのか？と考える。このような視点がその子への理解を深めることになる。

⑧「子どもは失敗して当たり前」という視点を持ちたい。十分な時間のない中で仕事をしている我々は、ちょっとした子どものつまずきにもイラつくことがある。子どもにしてみれば試行錯誤の過程であるのに。「子どもは失敗して当たり前」とは、そういう試行錯誤の過程を保障しよう、ということである。

⑨「子どもの問題は、子どものもの」という視点も重要である。現場では、子どもの問題を教師が肩代わりして取り組んだり、子どもに執拗にアドバイスしたりすることが多い。これを、「個別指導」と言っている。子どもの問題には、子ども達自身が取り組むことで、子ども達の学びになると言う姿勢を持ちたい。

⑩最後に「いろんなタイプの子どもがいて、当たり前」という視点である。積極的な子、慎重な子、とうとうと話す子、とつとつと話す子……。子どもの人柄は十人十色である。また、その上に様々な家庭状況を背負って学校に来ているのだから、様々な行動をとるのが当たり前である。「子どもは、元気に活動するもの」「子どもは素直に言うことを聞くもの」という子ども観の決めつけはしないほうがよい。

② 保護者との共同を

保護者との共同、とくに問題のあると言われる子どもの保護者との共同はかなり難しい。様々な実践レポートを見ても、その方法は千差万別でとりとめがないように思われる。そこで、私が心がけているいくつかの原則を記す。

①「情報提供」が第1原則である。先に述べたように、保護者は様々な不安感の中で子育てをしている。その不安感を少しでも和らげ、子どもの現在と将来への見通しを持ってもらうためには、情報提供が一番であると思われる。

情報の中には様々なものがある。学校でのこと（学級でのエピソード、行事の連絡、教育システムについて、先生の人となり、など）社会のこと（進路について、地域での子どもの姿、など）など、かなりの広範囲にわたる。これら、すべての情報を提供することは難しい。しかし、「情報をオープンにします」という姿勢を見せることはできる。

通信、懇談会、家庭訪問、そのほか、電話連絡や、連絡帳への記入、面談など、様々な場を使って、情報を発信していこう。

④「決めつけはしない」という心構えを持つように努力している。つい、「親なのだから、～が当たり前」という見方をしてしまう。この見方が「決めつけ」につながる。家庭での状況がつかみにくい現代で、保護者の困り感に寄り添うことはできにくいのが現実である。そこで、少なくとも「今の現状が、親としての最大の努力」と見るようにしたい。

⑤「保護者と共有できる子ども観をさぐる」ように努力している。一般化された「幸せの形」が崩壊している現在、子どもに保護者が求めるものも一般化できない。そこで、保護者が子どもにどんなことを望むのかをできる限り探してみる。点数にこだわる、身体能力にこだわる、人前でのパフォーマンスにこだわる、など、様々な保護者のこだわりをつかむようにする。担任一人ですべての保護者を把握はできないが、子どもの人間関係を見て、「この保護者とつながっておきたい」と思える場合だけでよい。こういう保護者のこだわりは、日常の子どもの言動に表れてくることが多いため、子ども観察が大切になる。

その保護者のこだわりを肯定するように努力するのである。このとき、子ども観の転換のところで述べた「いろんなタイプの子どもがいて当たり前」と言う考えが役に立つ。「いろんなタイプの保護者がいて当たり前」「どんなタイプにも、それぞれのよさがある」と考えるのである。

⑥「学校（担任）からの要求は、学校（担任）の指導方針を示すこととセットで」と考えている。子育てに不安を持っていたり、様々な子育て観を持っていたりする保護者に、一律に要求することは抵抗を招く。なぜ、それが必要なのか、保護者はどのように取り組むべきなのか、うまくいかない場合はどうすればよいのか、といった保護者の、いわば当然の、疑問に答える必要がある。

以上、私が大切にしたいと考えているいくつかの原則を書いた。これ以外のものや、実際の実践例については、今後岐生研でも深めていきたい。

③ 同僚・上司との共同を

①と②で述べた「子どもとの共同」「保護者との共同」を実践するには、同僚・上司との共同が不可欠である。その原則をいくつか示したい。

⑦第1原則は「情報共有」である。同僚・上司といっても、教室でどのような指導が行われ、子どもがどんな姿なのかは分からないことが多い。その分、不安も強い。「自分の学級だけ、うまくいっていないのではないか」「〇〇先生の指導は、不十分ではないか？上司として指導すべきなのか？」という具合である。そこで、積極的に学級の状態や、子どもの姿を伝えていくことが有効である。うまくいったことでも、いかなかったことでも、ありのままに伝える。伝え方は様々であるが、保護者からの連絡ノートをコピーして配布する、職員室で、休憩時間に子どもの事で愚痴（に聞こえること）をこぼす（できるだけ、明るいトーンで）、指導委員会や学年会で子どもの姿について話す、とすることができる。「私の学級がどんなに大変か」ということを分かってもらえなくても、笑い話のように応じてくれる先生が出てくればしめたものである。

⑧次に「とにかく相談」することである。「こうしたいのだけど、どんな方法がありますか？」

「〇〇先生の学級のようにするには、どうしたらよいですか？」と相談を持ちかけることである。また、生徒指導、教育相談、特別支援コーディネーターなどの役職を持っている人に積極的に相談することも有効である。時には、校長や教頭に相談を持ちかけることも大切である。

⑦そして、「うまくいかない、合意形成」ができるとさらによい。学校全体で取り組む「〇〇キャンペーン」などについて、「このように取り組んでみたけど、難しい」「こうしてみたら、子どもからこんな反応（行動）がかえってきた。どうしたらいいのだろうか？」など、「簡単じゃないよね」「より困る子がいるよね」という合意を何となく作り上げていく。こういう職員の雰囲気、統一的な指導に抗していく力になると期待できる。

このような取り組みを続けても、なかなか共同できない同僚・管理職もいる。下手に相談をすると「そういう子どもは、早めにガツンとやっておきなさい」というアドバイス(?)をもらうこともある。また、学力テストの結果を盾に、授業改善を執拗に迫ってくる管理職もいる。こういう人たちとは、「無理をしない」ことも大切にしたい。うまく棲み分けをするという発想である。こちらの考え方を押し付けるのは、ある意味暴力でもある。また、管理的・競争的・暴力的な方法しか知らない人たちにとって、その方法を否定されることは立場をなくすことになるため、抵抗は強くなる。

以上述べた3つの共同については、理論的・実践的にまだまだ不十分な面がある。岐生研の実践家のみなさんの日々の実践の中で確かめ、深めてもらえるとありがたい。